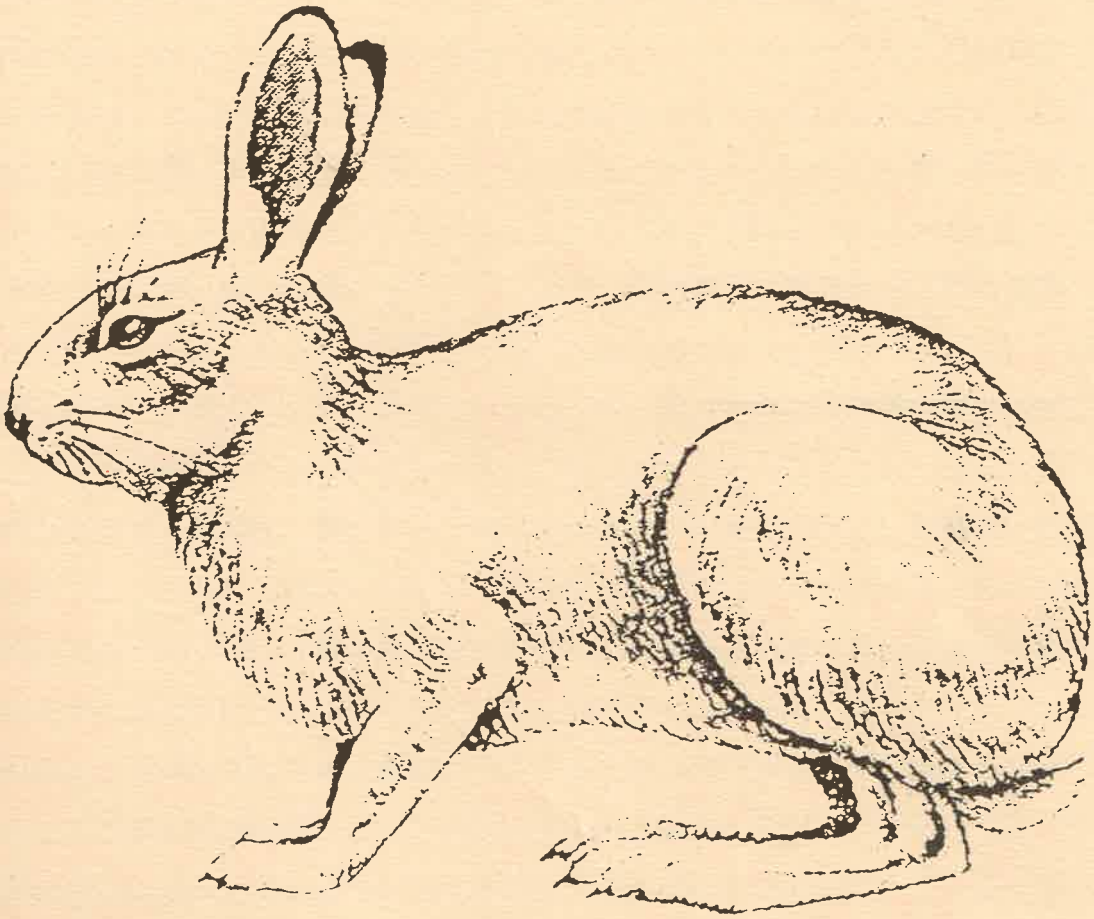
エゾマツ



No.63　2003.1.22

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目　次

1．巻頭言　２００３年の羊歳に望む……会　長　川　端　　功　治……（1）

2．会員の声……（3）

3．冬　将　軍……須　賀　　盛　典……（7）

4．農業と野生生物共存特区構想……吉　水　　勲……（9）

5．原始ケ原の観察会に参加して……武　田　　千恵子……（10）

6．きつね結び……小　澤　　敬　二……（12）

7．身近な自然と言うけれど……高　橋　　義　治……（13）

8．思い出の山　－狩場山－……川　端　　功　治……（14）

9．キーワード……（18）

10．観察会研修会情報……（20）

11．編集後記……（21）

〔巻　頭　言〕

2003年の羊歳に望む

会　長　　川　端　　功　治

年も改まり会友の諸兄には益々健勝で、ご家族お揃いの良い新年を迎えられた事と拝察し、慶賀至極に存じます。それぞれに希望に胸を膨らませた抱負などはいずれかの機会にゆっくりと話し合いたいものです。

わが協議会も新鮮な企画を模索し、入念な検討を加えた実行案を提示して会員の批判と指導を受けなければなりませんが、会員ご自身も斬新にして迫力のあるアイデアがあればご提案を願い、より以上のレベルアップを期待したいと考えておりますので、宜しくお願いいたします。

先秋は珍しくも関係のある諸官庁と合同共催の形式で（有り難う観察会）を野幌森林公園にて開催しましたが、新年の春の「有り難う観察会」と秋の年２回の観察会の進め方について、基本理念も含めて再検討の必要があると思われます。

事の始まりは観察路に散乱するゴミに胸を痛め、自発的に拾うレンジャー達が目に触れるようになり、通行人が称賛し、遂には観察会に参加した一般市民が共鳴し観察会全員がゴミを拾うという今日の「有り難う観察会」のスタイルになったと言う歴史的な経過を振り返ってみると、テレ臭さを拭いされば、誰にでも良心があって、市民としての責任と義務を果たそうとするものだと確信しました。

ところが最近野幌の森林公園にも粗大ゴミを不法に投棄する者が出没して、土地管理者や法令違反者の取締りに当局を悩ましているようです。

私達の選んで愛用させて戴いている観察路は車両の走る公道に近接していないので、投棄された冷蔵庫や自動車の古タイヤ等を憎々しく眺め、悲憤慷慨したことはありませんでしたので、それらの被害地を積極的に視察しようとする気持ちにはなれません。従って遊歩者のポイ捨てさえ無ければ、大切な観察路の清浄は保たれる訳ですから、レンジャーや協賛する一般参加者のゴミ袋とゴミ鋏を下げて歩く姿は、通行人にアッピールし、ポイ捨ての予防に絶大な効果が期待されます。

山道の落ち葉を踏むやわらかい音は季節の移り変わりを教えてくれ、時にはいろいろな果実が落ちていて、過ぎ去った昔の思い出がフトよぎる懐かしいひとときも、大切にしたい癒しだと思われます。

ゴミ一つ無い自然が一杯の観察路を目指して今年も頑張りましょう。

今年は羊さん！貴方の出番ですゾ。羊にふさわしい、平和で楽しい歳でありますように心から念願致します。

羊のデータ

今年の干支は羊です。羊は羊毛あるいは緬毛と称されるように動物繊維を生産してくれる動物です。日本でははは緬毛の緬の字を羊に冠して、メンヨウ（緬羊）と称してヤギ（山羊）と区別しています。性質は防衛武器をもたないため大変臆病であり、相互扶助のため群居性を好みます。最近では、遺伝子研究で、コピー羊が生まれています。

会員の声

「特定種～バイカモ」

旭川市　室谷　安雄

昨年、５月～１０月にかけ、１４年度河川水辺の国勢調査に参加する機会があった。ヤナギの判定にはすごく苦労した。美瑛川を調査中、実にきれいな湧水個所を発見、そこに北海道では特定種と言われる「バイカモ」がゆらゆらゆれていた。株数にして２０株未満。丹念に記録を取った。

他に、エゾタンポポ、オオアブノメソウ……目を楽しませる野草と出会った。特定種との出会いが以外と少なかった。危機感を感じる機会でもあった。

私の自然

江別市　中西　敏雄

野幌駅の南口から南幌温泉へ向う途中、およそ１kmの防風保安林があります。その林内では春から秋にかけて、数々の花が咲き乱れます。ノハナショウブ、タチギボウシ、サワギキョウ等が道行く人の目をたのしませます。小さな水たまりには、ヒツジグサの花も咲きます。

ところが数年前から、下草が刈り払われ、防風用の板囲いが立てられました。もとのような花が咲くのでしょうか。ヒツジグサは大丈夫でしょうか、大変気になります。

増毛の山紹介２

増毛町　谷　志朗

オロロンライン（国道２３１号）から眺める増毛山塊は、いつも雄大でわが町の宝物として輝き、春から秋まで多くの登山者で賑わいを見せてくれます。

今回は、海岸線から見た山の姿について紹介します。暑寒別の稜線が箸別方面から緩やかに続き、右隣の「西暑寒別岳」の大きな壁が山全体をどっしりしたものに見せてくれます。その右外側に「中ノ沢岳」、更に三角に尖った「雄冬岳」がひときわ目立ち、「天狗岳」と続いて日本海に切り立った崖を見ることがでします。

いずれも１０００ｍ以上の山からなる素晴らしい山並みです。機会をみて沢登り等にも挑戦してこの山の魅力を肌で感じてみては如何でしょうか。

網走市　佐久間　麻奈美

２年前、網走で行われた研修会に初めて参加させてもらい、その時の飲み会での「原生花園でやってみたら？」の一言でゴミ拾いからはじめ、去年は原生花園駅長のはからいで、たくさんのお客さんたちに花の説明をして歩くことができました。

今年の春から、網走観光協会で花のガイドをしてくれるボランティアを探しているという話がきて、交通費を出してもらえるというので、もっとたくさん活動できそうです。

お世話になった皆様、本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

白滝村　小栗　法韶

熊がよくでるところで、木を育て、家畜を飼い、野菜を作っております。所有地に小川、湿地、小山があり、多様な生き物が生育し易いように心掛けているせいか少しづつ様子が変わってきているのがわかるようになりました。

今年は、ベニバナイチヤクソウ、ノビネチドリの花をみて、一人にんまりしました。年中あれこれやらなければならないのですが、観察会にも参加しようと思っております。小屋があり、人が来て、いろいろ話し合うことを楽しみにしています。

石狩市　菊池　清美

自然観察会を楽しんでいます。春の山菜、秋のキノコ、夏の星。澄んだ空気と静かな森林の中で、休日はストレスの無いせいかつをしています。今年は日本野鳥の会のバードウォッチング検定に森の中で鳥を見るのも楽しく、春には3級なので、秋に2級と明年は1級の指導員をめざして勉強中です。

野幌森林公園での四季の観察会、たまには道民の森での観察会なども良いとおもいますが、皆さん如何ですか。登山をして高山植物観察会、野鳥観察会と楽しさいっぱいです。どうか道民の森でも楽しみませんか。野花などで俳句なども作って楽しんでいます。

私の一名山

札幌市　加藤　清春

7月20日、21日と1泊2日の予定で十勝岳又は上ホロカメトック山(1920m)を男5名のパーティーで朝5時出発の予定だったが、天候急変のためルート変更して三段山から上ホロめざしたが、三段山の頂上に着いてから、途中山くずれのため通行止めとか言われた。

どうしようかと打ち合わせしている時に尾根上に大砲岩がときどき見えるので、目標にしてルートのない所を2時間途中、イワブクロ、シナノキンバイ等、色々の植物が満開だった。登山も無事に尾根にでることが出来た一日であった。（このルートは0．Pルート）

新得町　加藤　幸夫

自然観察会の開催を東大雪地帯で企画されては如何でしょうか。私、平成８年の研修会に参加、以来道央、道北、道南と観察会を開催されておりますが、私は道東に住んでいて、距離的また年齢的にも企画に際し見送っている状況にあります。

なお会員数も他の地区より少数となっている実状で観察会の開催も未実施です。

然し、道東にも自然観察会に適地はあるとおもいますもて、今後、当協議会の計画に検討して頂きたく望んでいます会員の一人です。

「自然と写真と」

札幌市西区　小　山　賢一郎

自然、即ち地球を含む宇宙は神の創造の賜物との聖書の記述を信じ・確信しています。これを創造論といいます。

人間は創造された結果、この地球上に存在し、地球の自然を保護する（守る）責任と義務を神より委ねられていると考えます。

写真もこの観点・立場から、①自然保護・環境保全を第一に！。ついて、②危険と判断される場所には立ち入らない!!。そして、③人（ひと）との関係を大切にすること!!! を心掛けています。

お詫び

昨年10月発行の「エゾマツ」に際し、会員　小山賢一郎氏に「会員の声」の原稿を依頼いたしました。しかし、広報部の不手際で、№６２号に掲載されず小山賢一郎氏に大変不愉快な思いをさせてしまいました。ここにお詫びいたしますと共に本号に掲載させていただきました。

今後も本会のご協力と「えぞまつ」に対して忌憚のない意見・ご指導をお願致します。

冬　将　軍

江別市　　須　賀　盛　典

初雪後の時雨と小春日和の期間１１月下旬後半から１２月上旬にもなると本道の大部分で根雪を迎え、平均気温も氷点下になってくる。本格的な冬の到来でやがてクリスマス寒波、幕の内寒波、大寒と厳冬期を迎え冬将軍のお出ましとなる。

冬将軍はロシヤから来た言葉でナポレオンもヒットラーもロシヤの厳しい寒波に妨害されてモスクワを攻め落とすことがで出来なかった。ロシヤにとって冬将軍は、戦力で日本でいえば神風にあたる。

日本の冬将軍はシベリヤ大陸からやって来る。北海道上空５０００ｍ付近で氷点下４０℃以下ならば第一級の冬将軍だ。将軍は日本海の暖かい温泉（対馬海流）に浸り勢力を増し日本列島に厳しい寒さと、猛烈な北西の季節風、そうして日本海に大雪をもたらす。

シベリヤ高気圧

冬将軍の主役は大陸の高気圧で、シベリヤ高気圧とも呼ばれている。大陸の高気圧の発達するモンゴルの高原付近では、１１月から３月の５ヵ月は、日中でも氷点下の真冬日で最低気温が氷点下４０℃以下も珍しくない。冬は風も弱くこの期間の半数は快晴で雪も少ない。ウランバートルの２月の平均気温の平均値は氷点下２２．３℃、同じく降水量は５ヵ月で１５㎜程度である。このため放射冷却や北極海から南下する寒気団のため、この地方に寒気のドームが形成されて高気圧が発達する。また、シベリヤ大陸の南端にはチベットやヒマラヤの山塊があるためこれが障壁となって寒気を停留させ、インド洋からの暖気の侵入を防いでいるといわれている。

大陸の高気圧は周期的に強まり、時には厳しい寒波となり何日も吹き荒れ、日増しに積雪が多くなる。一方、冬型の気圧配置が長続きせずに暖冬となり、道東や道南では雪のない正月を迎えることもある。

海凍るテシロップ

北海道で紅葉が始まる１０月半ばには、オホーツク海北部のベンジンスキー湾やサハリン湾では薄氷が始まり、１２月半ばには５０㎝位の厚さに成長して沖合２５０㎞ほどに広がってくる。一方、北海道では１２月半ばを過ぎる頃には、内陸の池や沼はすでにこ凍り、道東では結氷が見られるようになる。根室では１月１８日、網走１２月２４日、釧路１２月２９日が港内結氷初日の平均値となっている。

「シバレル」は主に厳しい寒さに使う北海道語である。根室地方では、海水が凍り始めるころ、地元の人は「テシロップ」といっている。テシロップは時として幻想的

な光景を見せてくれる。冬の海に漂うシャーベット状に凍った氷は、海の色に染まり淡い色に見え、波に合わせて揺れ動き幻想的な雰囲気を漂わせる。最盛期には陸地から２００～３００ｍに広がる事もあるようだ。テシロップがやってくると寒さは厳しく、やがて沿岸はオホーツク北部から南下して来る流氷に覆われる日も近い。テシロップの語源はアイヌ語のタシコロ・プ。

一陽来福から冬の土用

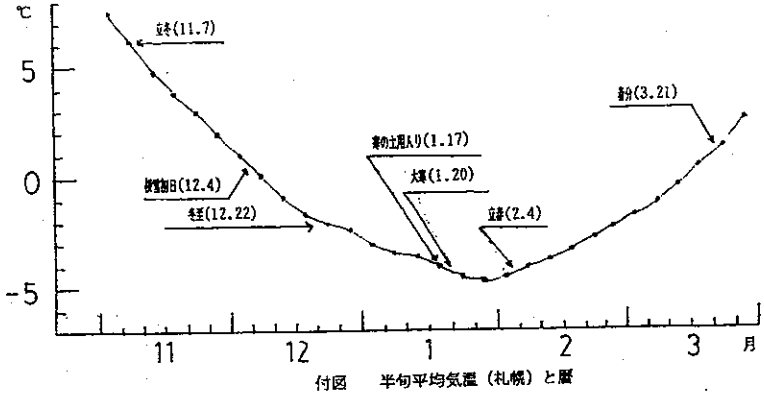
師走に入ると日一日と日の暮れるのが早くなり、一段と寒さを感じるようになる。２２日の冬至は一年中で昼間の時間が一番短くなる。しかし、冬至を境に昼間の時間は確実に伸びる。冬至は陰が極まって陽に転ずるめでたい日であり太陽の誕生日でもある。まさしく冬至を「一陽来福」といわれる由縁でもある。冬至を迎えると光は春に向うが、寒さは益々厳しくこれからが本番になって行く、「冬至冬なか冬はじめ」という言葉がある。

土用といえば鰻を食べる土用の丑の日を思いだすが、実は雑節の一つで立春、立夏、立秋、立冬のそれぞれの前１８日間をいい、その初日を土用の入りと呼んでいる。今年の寒の土用入りは１月１７日で１８日間には２４節気の大寒（1月20日）も含まれる。

冬至が冬はじめなら寒の土用は夏の土用と対照的に最も寒い期間で最高気温が氷点下の真冬日が続く、札幌の半旬別の平均気温で見ると、寒の土用の入りの１月中旬後半は氷点下４．０℃、同じく下旬前半氷点下４．５℃、下旬後半氷点下４．７、そして立春の２月上旬前半は氷点下４．５℃となっている。（付図参照）

立春を過ぎると気温は僅かづつではあるが上昇に向いなんなく春の気配を感ずるかにみえる。しかし、この頃から２月末にかけては低気圧が最も発達する時期である。

勢力が衰え始めた冬将軍と前進を始めた南の女神との出会いである。最初の出会いが「春一番」で「春を呼ぶ使者」ともいわれているが、北海道では「春一番の荒天」となる。また、低気圧の通過後は寒気の呼び戻しがあって季節変化の陣痛が続く。



付図　半旬平均気温（札幌）と暦

注：暦の日付は年により一日程度の誤差がある。

農業と野生生物共存特区構想

興部町　吉水　勲

今日まで、農業が野生生物の被害に遭っているのは言うまでもない。今、農業にとって野生生物は邪魔者でしかないような気がする。

この構想は、あえて、ある程度の被害を想定して、最初から野生生物用の畑を提供してはどうかと言う考え方である。但し、限界点があるのは言うまでもないが、住み分けられるような策を講じなければならない。例えば作物を一様に植えるのではなく、所々、線状に山の実、山菜等を植えたり、邪魔になる物を植えたり、嫌われるものを植えたり等を試行したりする。又、このオホーツク海沿岸の野生生物は塩分補給に海岸に出没することがある。これらを把握できれば、野生生物の食性の探求、個体数の把握、管理等にもつながる。そして、人間の居住区には近寄らない手法があるはずである。手間は掛かるが人間の英知を持ってすれば共存は可能と考えられる。

様々な策を講じることにより、家畜の健全な育成や農業の予定収穫を確保し、お裾分けとして野生生物に食させる。この事により、野生生物がより身近な存在となりうる。又、それなりの高見台などを設置すること等により、子供達の体験学習の場を提供したり、観光の一つとして一般の人々にも公開することもできる。

絶対に犯されないバリアーを引かなければならない所もあるのは否めないし、又、なんらかのバリアーを越えた場合は捕獲しなければならない場合もあるだろう、理想としては、人間と野生生物が注意深く、住み分けられる空間があってもいいのではないか。もちろん山林の植生、川などの環境も念頭に置かなければならないが、野生生物が生き続けられなければ、自然環境が変化して、おのずと人間生活も成り立たなくなるような気がする。

この構想により、野生生物を身近に感じたり、今まで以上に深く分かり合えることもありうると思われるし、研究員の常駐などによって、野生生物との共存の道も大きく開かれるのではないだろうか。

是非、この様な特別区を数カ所設置し、野生生物の被害対策に追われるのではなく、積極的に共存の道を探っていけないだろうか。

これらの施策によって、夢のある農業と自然環境がいつまでも続き、だれもが、穏やかで豊かな生活が営まれるような共存システムを構築できたら素晴らしいと考えます。この事について、皆様方の御意見を戴きたい。

オコッペ町レクリエーション協会 HP　http://www8.ocn.ne.jp/~orc/index.html

原始ケ原の観察会に参加して

札幌市豊平区　　武田　千恵子

６月２９日　下見の為、１２：３０分に富良野駅に集合。とにもかくにも暑い日で「北の国から」のテーマソングが流れていて観光客が多かった。

その後、車数台でニングルの森を過ぎ、原始ケ原にある山小屋に到着。周囲は空き地で明るいあっけらかんとした所だった。

いざ出発。前に富良野岳に登った時見た原始ケ原へ行けるというので私は張り切っていた。まず、ゴゼンタチバナの一株が私達を迎えてくれた。明るい野道を行きオオヤマオダマキ、オオバタケシマラン、ミソガワソウ、と教えてもらいながら、天使の滝？へ着く。ここで、おいしい水をいただく。エゾノカワジシャ、ミヤマタニタデ……があった。

この後、時間の都合で川沿いに山小屋めざして帰ることに。石に書いてあるペンキの矢印に従って歩くことになったが、歩きにくいことこの上ない。両手、両足をフルに使い、前の人にあまり遅れない様についていくだけで精一杯。花どころではなかった。しかし、ボラ連の強者達はそんな中でも、イチョウラン、キバナノコマノツメ、コミヤマカタバミ、ミヤマハンショウズル……を見つけていく。

その後、山小屋で大宴会が催されたらしい。

翌日、１０時少数の参加者と山岳会の方々と一緒に、

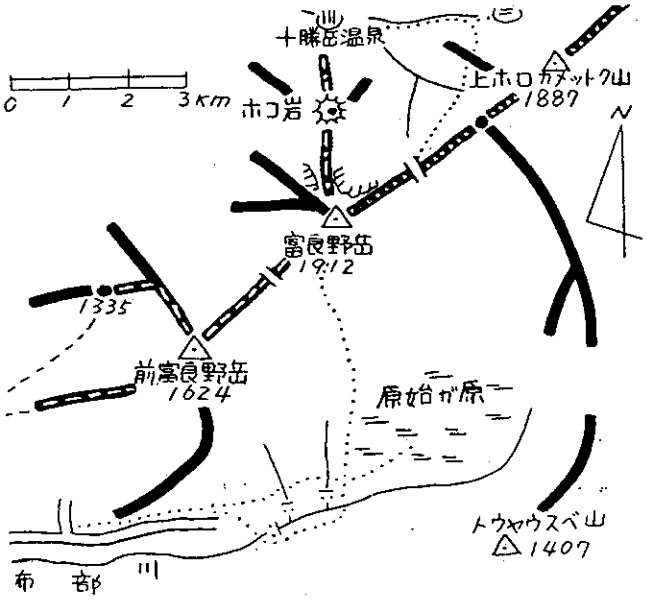
いざゆかん！　原始ケ原へ。

きのうの道をいき、さて、いよいよ森の中へという時、なにやらガサガサと木の揺れる音が。「さては…」と一同緊張。正体はオレンジ色の混じった大きなリュックを持った、お二人さん。大変怪しい。

やっと着いた。なにもない所だった。良く見れば、赤いショウジョウバカマ、ワタスゲ、花の終わったヒメシャクナゲ、などがあるにはあった。どうやら、とんでもない時に降った雪のせいらしい。ここで私は滝見物。

それはともかく、ボラ連の方々に連れて来てもらわなくては熊の危険の多い原始ケ原へ来ることはなかったと思う。協力して下さったすてきな山岳会のおじさま達をはじめ、関係者の皆さんは本当に感謝している。

解散後、さっそうと自転車で暗い森の中を帰っていった、南部さんの姿が忘れられない。



平成１４年度の地方観察会の一つとして、原始ケ原の観察会を実施しましたが、１５年度も楽しい地方観察会を企画中です。会員の皆様の中で、プランがありましたら事務局までお知らせください。

きつね結び

帯広市　小澤　敬二

去年（平成13年）の１２月１２日の北海道新聞夕刊に、「きつねむすび発見」という記事があった。「きつねむすび」は、小さな虫がヨシの葉の先端を次々と巧みに編んだようなもので、これが見られる年は豊作だと言われている。

道内での最初の記録は江戸時代の菅原真澄で、上ノ国町で子供に見せられたスケッチも残されているという。それから２００年後、植物研究者の板谷等氏が江差町で発見したという。

この記事をみて私は驚いた。じつは、私も十数年前の昭和６１年の９月に芽室町で発見し、植物標本にして保管した。しかし、その標本は引っ越しのときに処分したのか、いくら探しても見つからなかった。標本を縮小コピーで印刷し、私の自然情報誌で友人や知人に紹介したものが残っていた。それがこの図である。

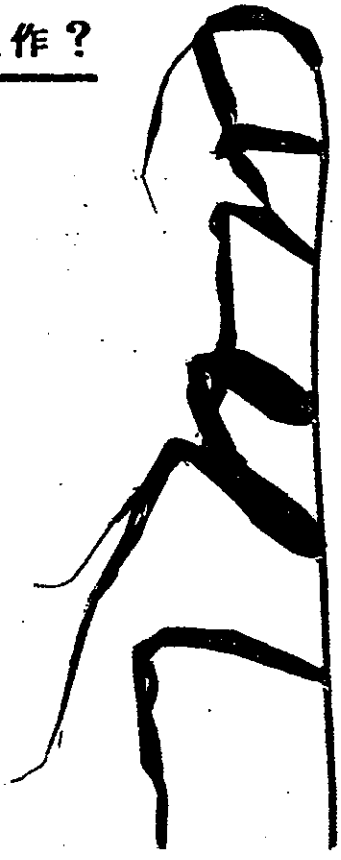
また、数年前にも帯広市内の公園の池で発見した。探鳥会のときだったので参加者に紹介したのを記憶している。

「きつねむすび」は上ノ国で初記録され、２００年後に江差町で再発見されたが道南地方だけのものではなく、極めて稀にしか発見されないものでもないようだ。

やはり、資料や記録は大切にしなければならないものだ。今年は家の中で「きつねむすび」の標本を探したが、来年はヨシ原の野鳥とともに「きつねむすび」も探そうと思っている。

クモの工作？

右の図は、ヨシの葉をまげて次々に組み合わせたものです。これはクモが作ったものだと言われています。どんなクモが、どのようにして、なんのために作ったのかわかりません。とにかく、おもしろいものでね。うまく作るものですね。みなさんもクモにまけないで、このような作る遊びしてください。



身近な自然と言うけれど

（オホーツク支部）・北見市　　高橋義治

昭和１ケタ生まれの私には、北海道の自然には郷土の開拓当時の人為を受けない「原生自然」と「現在の自然」との二つの考え方に立つのが妥当ではないかと考えられ、次のように扱ってきました。

①「原生自然」については（開拓当時には云々と…自然と開拓先人との生活のかかわり等）を解説に付け加えています。

②「現在の自然」いわゆる人為遷移を含む自然は一般市民の方々には生まれた時から慣れ親しんできた自然で、（本州移入のカラマツや国外から輸入された通称・ポプラ・アカシャ・ドイツトーヒなどの動植物が混在する自然）。

これらについては、「開拓後のいろいろな社会の変化から北海道に持ち込まれ、今では新しい北海道の自然となりました。」と説明してきました。

以上は、北海道の特異性とも言うべき、開拓の人為が加わる以前の自然が、開拓の鍬がおろされてからほぼ百年、開拓と言う人為の代償としての新しい自然へと、開拓の人々との生活に係わりを持ちながらできあがってきたことを、自然観察に集う一般市民の方々が少しでも理解し、そして市民一人一人が自然保護への判断ができるようになってほしかったのです。近年保護活動としての絶滅種の保存の問題・北海道のブラックバスの放流問題等も、各々の分野で、①②の考え方で整理して説明すれば、理解も得られましょう。

また、北海道でも開拓の人々の生活と自然との係わりなども、道南西部地帯や道北日本海沿い等と、オホーツク地帯とは異なることもあることから、その地域々々の実情を考慮する必要があると思います。観察会の「あれなに・これなに」から抜け出し、参加者が、たのしく、自然の恵みを感じてもらえるように頑張りましょう。

思い出の山 －狩場山－

（標高　１５１９．９ｍ）

札幌市西区　川　端　　功　治

道南の最高峰である狩場山は道南人にとつて自慢の山であり、憧れの山でもあります。それは札幌近郊では群を抜いて最高とされる余市岳（１４８８．１㍍）よりも更に高いので、その高さ加減の見当が凡そ付くと思います。

憧れの秀峰と云いたいところですが、ずんぐりむっくりで、なにかが寝そべって居る感じの山。それは稜線が湿地帯や小池を含めたなだらかな起伏の尾根なのです。従って湿原植物ハンターのマニアが感激してリスト作りに夢中なる場でもあります。

それに東の方向に、島牧村ご自慢の名峰大平山が聳え、なにかと対比されるのが面白い。大平山は石灰岩の山で乾性の植物で名高く、狩場山は湿性の植物で、有名であります。狩場のナガバツガザクラと、大平のオオヒラウスユキソウが名声度を競い合うのも一興です。

この山ほど、どのコースを選んで登るかを、迷わされるのも珍しい。

植物学者である梅沢俊氏が自分の足で計測した登山所要時間は次の通り。

＊千走（チハセ）新道コース。　２時間２０分

＊茂津多（モッタ）コース。　６時間

＊真駒内コース。　４時間２０分

＊千走旧道コース。　３時間４０分

＊馬場川コース。　（手入れ不十分につき除外）

＊須築（スッキ）川コース（渡河ロッククライミングを必要とするので除外）

結局時間と暇の無い方、安全で比較的楽に登りたい方は、トップに掲げた千走新道コースがベスト。その目的の為に造られたコースだから当然のことと云えば、

当然と云えます。それは長い月日を掛けた村興し運動の成果なのです。
島牧村が大漁で沸き立っても、消費地に直結した道路が無ければ安定した販路が得られない。日本海と太平洋を結ぶ峰越林道が完成して海抜７００㍍台まで登った林道は反対側の国道を経て函館本線に連絡したのです。

この途中から登山用千走新道が、スタートすることになり、為に道内一を誇るガロウの滝、千走温泉を含めて島牧村の観光資源が一挙に開花したことになりました。環境破壊、過剰投資云々のキビシイ時世によくぞ乗り切ったと云うところでしょうか。

他のコースにもそれぞれ得失があるので、参考までに付記しておきます。

＊千走旧道コース

途中岩石塊を這い上がり、ズリ下り、横に寝そべるダケカンバを何回も跨ぎくたびれた足をハイマツの根に引っかけて転倒。（梅沢他著夏山ガイドNo.５２７頁の写真をご覧下さい）

もう一度この道を登りたいと云う意欲を失わせます。

＊茂津多コース

岬でキャンプして魚釣り（ヒラメ、ソイ、アブラコ、ガヤ、タコ）に飽きたら山登りでもと云う元気一杯の若者向き。笹また笹の単調に耐えながら登ります。

＊真駒内コース

このコースの名前を聞いただけでも、元気が出ます。なぜなら私の若き日、希望に燃えながら赴任した東瀬棚営林署の管轄コースだから思い出が一杯。北海道知事になつた田中敏文氏が、ブナ開発に鋭意努めた勤務署でもあります。この地方の慣習として、各官公署諸団体は狩場山登山会を年中行事にしております。これお登山競争グループと、お散歩型グループに分けて署のレクレーションがスタート。私も一応競争グループに入り同時スタートしたが、製材工場乾燥工場、土場、トラック部隊、架線搬送組等若手の揃ったグループは、アッと云う間に視界から消え去りました。

このコースから眺める風景は正に絶佳。谷あり崖あり、迸る奔流に映えては

砕け散るブナの緑に、心が洗われる思いです。

この緑一色にどっしりとした、重みを加えているのがブナの巨木達です。

是非一度ブナの巨木の肌に触れて見ませんか！　これが私のコマーシャル。

ところで登山競争の方はどうなったか。勿論私が１等賞。

かつて羊蹄山の登山競争に参加して、私がバテた時のスタート・ダッシュと今回の若者達のスタート・ダッシュがソックリさんなのです。

途中累々とマグロを転がしたような荒い息づきの若者達を励ましながら、ピークの標高柱にタッチしても、当然の事として格別感動は無く、かえつて汗塗れでゴロゴロ転がる若者達の若さが羨ましかった。

後日床屋さんでトラック組のボスが「良く聞けよ、お前ら！狩場山登山マラソンで署長を追い抜いたら承知せんぞ！」と訓示を垂れていたそうです。

真相はどうあれ狩場山は楽しい思い出を残して呉れた忘れられない一名山です。

次に故館脇博士や学会報文より地帯別に分け、重複を避けた資料を掲記します

記

＊狩場山（１５１９・９㍍）「カリンパウシー山桜の皮が採れる所の意味」

＊狩場山山塊は全山火山岩より成る死火山でオコツナイ岳（１１７０・４㍍）前山（１２６０・２㍍）狩場山、東狩場山（１３１８・８㍍）フモン岳（１３３７・３㍍）が馬蹄形に並び、尾根筋はハイマツとチシマザサで狩場山南面に、ほぼ三角状のお花畑がある。

＊山頂付近の矮性灌木類。

キバナシヤクナゲ　アオノツガザクラ　クロマメノキ　コケモモ

ガンコウラン　イワウメ　エゾマルバシモツケ　ミネヤナギ

＊山頂付近の草本類

タカネヒカゲノカズラ　タカネスズメノヒエ　エゾノハクサンボウフウ

エゾシオガマ　ヨツバシオガマ　ウメバチソウ　ミヤマオダマキ

エゾウサギギク　ミヤマセンキュウ　コガネイチゴ　ミヤマダイコンソウ

ミヤマヌカボ　タカネノガリヤス　コメススキ　コガネギク
エゾボウフウ　チシマザサ　イトキンスゲ　ミヤマクロスゲ
コメススキ　タケシマラン　ウメバチソウ

＊山頂付近南面湿潤地帯

イワイチョウ　エゾホソイ　ミヤマキンポウゲ　エゾカンゾウ
クロバナギボウシ　シナノキンバイソウ　チングルマ　ミヤマキンバイ
カワズスゲ　ミヤマクロスゲ　フギレスミレ　チシマニンジン
エゾボウフウ　エゾウサギギク

＊ハイマツ地帯ーーー（括弧）内は分布上注目すべき植物ーーー

（ベニバナイチゴ）　ウラジロナナカマド　タカネナナカマド
マルバシモツケ　カラマツソウ　（エゾホソバトリカブト）
ミヤマホツツジ　ミヤマハンノキ　チシマザクラ　オガラバナ
ミネカエデ　リンネソウ　ヒメスギラン　チシマニンジン
コガネイチゴ　ゴゼンタチバナ　ツマトリソウ　ショウジョウバカマ
ヒメゴヨウイチゴ　ミヤマワラビ　（ナガバツガザクラ）

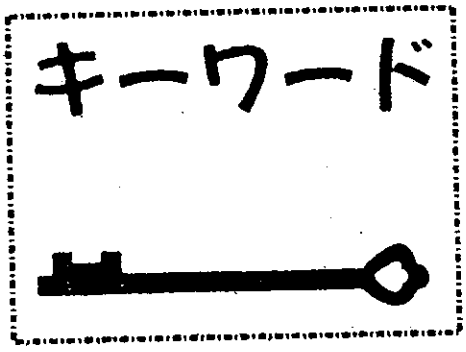
＊岩石地帯

（カリバオオギ）ー狩場山の特産種ー　以上文責　川端功治

文献ー狩場山を登山される方の必読書

ー梅沢、菅原、中川共著「北海道夏山ガイド」№５道南・夕張の山

北海道新聞社刊行定価１８００円



ラムサール条約

国際的に重要な湿原の保全を目的とするラムサール条約事務局は、2002.11.18、国内最大最北のマガン寄留地である美唄市と宮島沼（同時に愛知県の藤前干潟）を新たに同条約の登録湿地に指定しました。

ラムサール条約とは、正式には「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」といいます。この名の通り地球規模で移動する渡り鳥などの餌場となるウェットランドの生態系の保護を目的に１９７１年にイランのラムサールで採択されたため「ラムサール条約」と呼ばれています。

ウェットランドとは広い意味で水と大地の出会うところ、または水深６メートル以下の水辺とその周辺をさし、湿地、湿原、干潟、湖沼、河川、海岸、水田、珊瑚礁などが含まれています。

また、天然、人口、淡水、海水、そして長期的、一時的な水辺のすべてが該当します。登録地の選定の基準は

①その土地における代表的なまた特異な価値を有する。

②絶滅のおそれのある動植物が生育するなど生物多様性を維持するために特別の価値がある。

③２万羽以上の水鳥が規則的に生息するなど多数の水鳥が生息できる価値があるウェットランド。

ただ、最近は条約の目的が単なる水鳥の保護からウェットランドの生物多様性全体の保護へと比重を移しつつあり、１９９９年の締結国会議では国土を生物地理上の区分で線引きした上で、それぞれの区域の代表的なウェットランドは保全されるべきとの新たな基準が示されました。

締結国は自国のウェットランドを少なくとも１箇所指定・登録して、その保全を図らなければなりません。ウェットランドの保全はワイズ・ユース（賢明な利用）を原則としています。３年ごとに締約国会議を開催して新たな登録地の選定を行い、既登録地の問題について話し合います。

日本は１９８０年に締結国となり、昨年の２箇所を含め１３箇所が指定されています。その中で北海道は６箇所あり、日本のほぼ半数を占めています。

登録された宮島沼は、昨年の春の調査でマガンは６万５千５百羽を数え、国内で越冬するマガンのほとんどが中継地として利用しています。

このようにマガンが増えた理由は、狩猟に使われた鉛弾をマガンやハクチョウが飲み込んで鉛中毒を起こすようになり、地元の猟友会が１９８９年から猟を自粛したのが一つの理由になっています。しかし、今度は数が増えて、減反で作付けが広がった小麦の食害が発生して、共生の難しさが地元に重くのしかかっています。

自然と人との共生の課題をかかえながら宮島沼は新たな一歩をふみだしたと言えます。

〔道内の登録地〕

クッチャロ湖

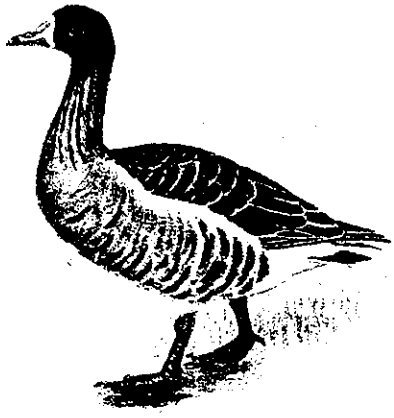
霧多布湿原

厚岸湖

別寒辺牛湿原

ウトナイ湖

宮島沼



観察会研修会情報

《１月以降の活動予定》

２月９日（日）　　１０：００～１４：３０

冬の森の観察会　野幌森林公園ふれあい交流館

昼食の用意をしてください

（下見　２月８日　10:00~　ふれあい交流館）

３月２３日（日）　　１０：００～１２：００

早春の森の観察会　野幌森林公園開拓記念館

（下見　３月２２日　10:00~　開拓記念館）

１月２６日（日）　　１０：００～１６：００

「道民とともに考える森づくりの集い」

会場　かでる２・７（札幌市中央区北2条西7丁目）

道の森林環境室森林活用課の主催でおこなわれるこのイベントにボランティア・レンジャー協議会も参加を要請され参加いたします。

内容は、①ポスターセッションと②森の情報発表の二つの領域がありますが、本会は主にポスターセッションに参加します。

ポスターセッションとは「情報提供者が情報交換したい内容を提示し、参加者と情報提供者がその場で自由に質疑応答しながら交流する」場所で、ポスターパネルを準備しているところです。

会員の皆様もぜひ参加してください。

編集後記

◆平成１５年の新春を迎え、会員の皆様には今年の活動の思いをあれこれと心に描いていることでしょう。一人ひとりの自主活動が、自然に対する理解の深まりとなります。本会もその手助けになる組織として発展させる努力を続けていきます。

◆夜空を眺めると、冬の星座「オリオン」がまたたいています。宵空では南の空にはっきりと見えます。特に三つ星が厳冬の空にキラキラ光っています。防寒着に身を包み、一時、星の世界に浸りましょう。

◆平成１４年度の活動も残すところ３ケ月となりました。次号は今年度の観察の報告を別冊でお届けする準備をしています。各地での今年度の活動の集約がありましたら事務局まで（TEL 011-791-0127 ）ご連絡ください。

◆経済危機が叫ばれて久しく、その回復をめざす改革が遅々として進まぬ昨今です。本会も将来を見据えて、会の改革を会員の声で成し遂げて行く必要があります。

北海道ボランティア・レンジャー協議会
会報誌「エゾマツ」No.63　2003.1.22 発行
発行責任者　川　端　功　治

表紙絵　エゾユキウサギ

森の中の雪面にエゾユキウサギの足痕が点々と続いています。所々に笹の葉を食べた痕や糞も見ることができます。これらの生活痕から行動を推測するのも楽しいことです。